

朝鮮民主主義人民共和国の人民軍烈士墓

—— 朝鮮戦争の戦死者はどこに眠っているか ——

水野 直樹

(立命館大学客員教授)

はじめに

朝鮮戦争が朝鮮半島のみならず世界の現代史においてもきわめて大きな位置を占める出来事であることは、あらためて言うまでもない。そのため朝鮮戦争に関しては、これまでも数多くの研究が当事国であるアメリカ、韓国、中国をはじめとする世界各国でなされ、日本においても多くの研究書、論文が書かれてきた。それらの研究の中には、朝鮮戦争がどのように記憶されてきたか、記憶されているかを考察する研究も多く含まれている。

しかしながら、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略す）において朝鮮戦争がどのように記憶されているかについて論じた研究はそれほど多くない。中でも、戦争で戦死した将兵がどこに埋葬されているか、彼らの墓がどのように扱われているかを明らかにする研究は、まったくなされていない。

むしろ、朝鮮戦争の戦死者の墓が北朝鮮には存在しないとし、それを1つの論拠にして北朝鮮の国家としての「特異性」を論じた研究もあるほどである。2人の人類学者（在英韓国人の権憲益と韓国の鄭炳浩）が書いた『劇場国家北韓』（英語版2012年3月発行、韓国語版2013年2月発行）がそれである¹⁾。著者の鄭炳浩は数度にわたって平壤を訪問したことがあるほか、著者たちは北朝鮮に関する多くの文献と証言を集めた結果として、次のように述べている。

我々を当惑させるのは、国家的記憶を保存しているとされるところに、朝鮮戦争の犠牲者の痕跡を見つけることができないという点であった。大城山墓域〔革命烈士陵—水野〕にないだけではない。北朝鮮当局が外国からの訪問者に提供する国家記念物の長い目録には、戦死者墓地に関する言及がない。実際のところ、我々が調査した相当な分量の北朝鮮の文献にも、戦死者墓地の存在を示す記述はなかった。／当然にもこのような疑問が生まれる。この革命烈士陵でなければ、彼らはどこにいるのか？ 朝鮮戦争で犠牲になった北朝鮮兵士たちの遺骸は、どうなったのか？²⁾

著者たちは、長期間北朝鮮滞在の経験がある外交官、国際機構職員、北朝鮮現代史の専門家や北朝鮮関連の業務を担当する韓国の政策専門家たち、そして、最近の脱北者たちとも、この問題について話を交わしたという。専門家たちは、戦死者墓地が存在しない理由を様々に解釈したが、「このような多様な見解にもかかわらず、北朝鮮の朝鮮戦争戦死者記念に関して、話を交わした大部分の人びとが同意したのは、現代的戦死者慰霊の慣行において、北朝鮮の戦争記念文化は一つの例外だという点である³⁾」と

というのが、著者たちの結論である。つまり、韓国の顕忠院や米国のアーリントン墓地のような戦死者のための国立墓地が北朝鮮に存在しないのは、戦死者慰霊の慣行について北朝鮮が「例外」であることを示しているというのである。

著者たちは南北の文化統合を図るには北朝鮮の政治・文化を内在的に理解しなければならないという立場に立っており、そのために執筆した研究書であるにもかかわらず、結局、戦死者慰霊の問題に関しては、北朝鮮が近代国民国家とは性格の異なる国家であるという結論を導き出していると言えよう。

では、2 人の人類学者が述べているように、北朝鮮には朝鮮戦争の戦死者を埋葬し顕彰する施設が本当にないのだろうか。この研究書が韓国で出版されて 5 カ月後、ピョンヤン市内で「祖国解放戦争参戦烈士墓」の竣工式が金正恩も出席して催された。出版が少し遅れていたなら、著者たちも内容を書き換える必要を感じたであろう。

しかし、祖国解放戦争参戦烈士墓（以下、参戦烈士墓とする）が造成される前から、北朝鮮各地には「人民軍烈士墓」が存在していたのである。どこに、いつからあったかなど詳しいことは不明な点が多いが、本稿では、人民軍烈士墓の存在を明らかにすることを通じて、北朝鮮で朝鮮戦争がどのように記憶されてきたかを考えたいと思う。

なお、朝鮮戦争期間の北朝鮮の死者数は、将兵約 50 万人、民間人約 200 万人とされる⁴⁾。1949 年の北朝鮮の人口が 962 万人であったことからすると、住民の 4 人に 1 人が犠牲となったのである。いかに苛烈で残酷な戦争であったかがわかる。朝鮮戦争で北朝鮮がこれほど多くの犠牲者を出したのであれば、彼ら／彼女らがどこに、どのように埋葬されているか、どのように記憶されているかを明らかにすることは、北朝鮮の政治・社会を理解する上できわめて重要な研究課題であることを特に強調しておきたい。

1 大城山革命烈士陵と愛国烈士陵

(1) 革命烈士陵

人民軍烈士墓の問題を取り上げる前に、すでによく知られているピョンヤンの大城山革命烈士陵と愛国烈士陵について見ておくことにしたい。なぜなら、この 2 つの施設にも、朝鮮戦争の戦死者の墓が存在するからである⁵⁾。

金日成らによる抗日パルチザン闘争参加者の墓地として知られる革命烈士陵は、1974 年に造成されたものだが、パルチザン戦士たちの墓はそれ以前に存在していた。1948 年 12 月 14 日、朝鮮中央通信は次のような記事を配信した。

故安吉先生の一周年追悼会

（ピョンヤン 14 日発朝中通＝新垂）朝鮮人民軍総司令部参謀長故アン・ギル（安吉）先生の逝去一周年追悼会が十二日キムイルソン首相以下内閣各相、各政党社会団体代表、朝鮮人民軍隊軍人遺家族、友人賄氏「有志」の誤りか一水野等多数参加してモランボン（牡丹峰）墓地で厳粛に行われた。追悼会はハン・ビョンオク氏の司会ですすめられ、建立された墓碑の除草、参けい者の花環進贈などがありチヨエ・ヨンコン〔崔庸健一水野〕民族保衛相の追悼詞があった⁶⁾。

パルチザン闘争の参加者であり、解放後、保安幹部訓練大隊部（朝鮮人民軍総司令部の前身）総参謀長を務めていた安吉は、1947年12月13日に死去した⁷⁾。死去直後ではなく1年後に、安吉の遺骸がピョンヤン市内の牡丹峰墓地に葬られたことを伝えるこの記事から、パルチザン参加者の墓地が1948年頃に牡丹峰に造成されたことが推測できる⁸⁾。安吉の遺骸は、その後革命烈士陵に移葬された。

朝鮮戦争後の1954年4月5日、ピョンヤンの大城山に革命烈士墓域が造成され⁹⁾、北朝鮮各地域、中国東北地方、ソ連沿海州などに散在していた100名余りの遺体を集めて埋葬したという¹⁰⁾。

現在の革命烈士陵の造成が計画されたのは、抗日パルチザン闘争が唯一の革命伝統とされるようになった1960年代末～70年代初めのことである。1972年4月17日、金日成が党中央委員会政治委員会で抗日革命烈士陵建設を教示した後、大城山の朱雀峰の尾根に35万㎡の墓地を造成する工事が進められ、1975年10月13日に竣工した。さらに、1985年10月には、金正日の主導で「大記念碑的創造物」として改建・拡張されて、現在に至っている¹¹⁾。

1991年時点で、抗日革命烈士111名（合葬者を除く）の墓（銅製半身像）がこの革命烈士陵に存在していた¹²⁾。最上段に15名（中央に金正淑）、2段目からは中央通路を挟んで両側に6～9名の墓碑と胸像が8段にわたって置かれている。2000年の時点では131基の墓が存在していた。最近では、2015年11月7日に94歳で死去した李乙雪が埋葬された¹³⁾が、今後革命烈士陵の墓が増える可能性はほとんどないと見られる。

これらパルチザン戦士（2000年頃に存在した131名分）の所属と死亡時期を見ると、次のようになる¹⁴⁾。

（所属）	朝鮮人民革命軍指揮官	120名
	朝鮮革命軍指揮官	5名（人民革命軍指揮官にもなった1名は除く）
	祖国光復会	3名
	朝鮮民族解放同盟	1名
	汪清県政治工作員	1名
	その他	1名
（死亡時期）	解放前	80名
	解放～朝鮮戦争	4名
	朝鮮戦争期	11名
	戦争後	36名

つまり、大部分が解放前の「朝鮮人民革命軍」に所属したパルチザン闘争参加者のうち、解放まで生



（画像1） 革命烈士陵の半身像と墓碑
（右がキム・ビョンス、左がパク・チャンチュン。いずれも朝鮮戦争の戦死者。2012年5月筆者撮影）

き延びた数十名が朝鮮人民軍などの幹部として朝鮮戦争に参戦し、そのうち 11 名が戦争期間中に死去したということになる。よく知られる人物としては、金策（朝鮮戦争時は軍事委員会委員、前線司令官）、姜健（総参謀長）がおり、それ以外にもチェ・チュングク、チョ・ジョンチョル、ハン・チャンボン、シム・ユンギョン、リ・チョルス、チェ・ジャンマン、キム・マニク、キム・ビョンス、パク・チャンチュンが朝鮮戦争での戦死者である¹⁵⁾。

(2) 愛国烈士陵

愛国烈士陵は、「祖国の光復と社会主義建設、国の統一偉業のために闘争し犠牲となった烈士、党および国家・軍隊の幹部たち、科学、教育、保健、文学芸術、出版報道部門など各部門の功労ある働き手たち」を顕彰するために、1986 年 9 月 17 日ピョンヤン市兄弟山区域シンミ洞に竣工した墓地である¹⁶⁾。当初は、被葬者を葬った墓に墓碑を立てていたが、1998 年 9 月共和国創建 50 年に合わせて改建し、墓碑に「石写真」¹⁷⁾がはめられた。筆者が参観・調査した 2012 年 5 月の時点で、762 基の墓（合葬者を含むと 803 名分）が存在したが、その後も毎年 20～30 名が埋葬されているので、現在では 900 基近くになっていると思われる¹⁸⁾。

この愛国烈士陵には、植民地期の民族運動家・革命家や解放後の南での統一運動家・革命家、海外の朝鮮人指導者や、北朝鮮の党・国家機関の幹部、科学や芸術など各部門の指導者のほか、朝鮮人民軍の幹部も埋葬されている。そのうち、朝鮮戦争が続いた 1950 年 6 月から 1953 年 7 月までの期間に死亡したとされる人物は 43 名で、そのうち墓碑に「戦死」と記されている人物が 20 名となっている¹⁹⁾。つまり、革命烈士陵と同じように愛国烈士陵にも朝鮮戦争で戦死した少数の将兵が葬られていることになる²⁰⁾。



(画像 2) 愛国烈士陵の墓碑

(「リ・スボク同志／朝鮮人民軍分隊長／共和国英雄／1933 年 4 月 12 日生／1951 年 10 月 31 日戦死」、2012 年 5 月筆者撮影)

2 各地の人民軍烈士墓と人民軍烈士塔

(1) 戦争時期・戦争直後の人民軍烈士墓

では、朝鮮戦争で戦死した朝鮮人民軍将兵の大多数は、革命烈士陵や愛国烈士陵でないとすれば、どこに葬られているのだろうか。

当然のことであるが、戦死した将兵の死骸がそのまま放置されていたとは考えられない。38 度線以南の戦場、あるいは米軍を主体とする国連軍や韓国軍が 38 度線を越えて進撃した時期の北朝鮮地域の戦場で戦死者の死骸を葬る余裕はほとんどなかったであろうが、これらの地域や激戦地以外では、何らか

の形で死骸を埋葬したと考えてよからう。そのような埋葬地が最初から「烈士墓」と呼ばれていたかどうかは不明だが、朝鮮戦争停戦の頃には「烈士墓」という名称が定着していたと思われる。

その点で注目されるのは、先に紹介した権憲益・鄭炳浩共著『劇場国家北韓』が次のような証言を脱北者から得ていることである。

朝鮮戦争戦死者の墓地に関しては、脱北者の大部分がそのような墓地については見たり聞いたりしたことがないと言った。そのうち何名かは、我々の質問に驚きを示しながら、自分たちが北朝鮮に住んでいた時は、そんな考えを一度もしてみたことがないと言った。／しかし、何名かは地方にある朝鮮戦争戦死者の集団墓地について話をした。それらの場所では、戦争中に地域住民たちが近くで発見した人民軍兵士の死骸を集団で埋葬した。そのうちの一部は戦後に記念の場になった。戦後数年間は、このような墓地に地域住民たちが常にやって来て、後にいくつかの村では地域の人民委員会が木でつくった墓標や墓石を立てたりもした²¹⁾。

戦死した人民軍兵士の死骸を地域の住民が埋葬したのは、衛生上の問題からだけではないだろう。戦死者を葬ることは、同胞として、人間として自然な行為でもあったと考えられる。そのような集団埋葬地の一部が戦後には「記念の場」となり、追悼行事が行なわれたり、墓標・墓石が立てられたりしたというのである。それらが次第に「烈士墓」という名称に統一されていったのではないかと考えられる。

朝鮮科学百科事典出版社と韓国の平和問題研究所が共同編纂した『朝鮮郷土大百科』(全20巻、平和問題研究所発行、2005年)は、平安南道徳川郡新城里(第3巻220ページ)、平安北道球場郡球場邑(第5巻270ページ)、平安北道枇岷郡枇岷邑(第6巻521ページ)、黄海北道松林市絲浦一洞(第10巻104ページ)、咸鏡北道清津市洛陽洞(第14巻120ページ)、咸鏡北道吉州郡吉州邑(第14巻364ページ)などに人民軍烈士墓が存在していることを記している。このうち、球場郡の人民軍烈士墓については、「6・25戦争〔朝鮮戦争〕時期、再進撃路を開拓する戦闘で戦死した烈士たちが安葬された」と説明されている。

さらに、「人民軍烈士墓」にちなんだ名称を持つ山などがあることも紹介されている。平安南道檜倉郡檜倉邑の人民軍烈士墓山(第4巻551ページ)、黄海南道海州長芳里の北にある烈士墓山(第8巻102ページ)、咸鏡南道金野郡新塘里の西南にある烈士陵山(第12巻443ページ)、咸鏡南道咸州郡高陽里の東南にある烈士峰(第13巻443ページ)などである。

これらの烈士墓がいつから存在するかが記述されていないので、造成時期を知ることができないが、朝鮮戦争の期間中、あるいは停戦直後の時期だったと考えられる。

『朝鮮郷土大百科』に記述されていることから考えると、各地に人民軍烈士墓が存在することは、秘密にされていたものではなく、公表してもよい事実であったのである。にもかかわらず、その存在があまり知られていなかったのは、北朝鮮のメディアに登場することがほとんどなかったからでもあるが、その存在に注意を払うことなく北朝鮮の「特異性」に目を奪われてきたからではないだろうか。

各地の人民軍烈士墓のうち、早くから北朝鮮メディアで報じられてきた唯一の例は、1957年2月4日に除幕式が行なわれた開城市の朝鮮人民軍烈士墓である。これは、朝鮮戦争停戦協定によって1954

年9月1日から10月11日までの間に進められた「敵我双方間軍事人員死体交換事業」（朝鮮人民軍・中国人民志願軍と国連軍・韓国軍との間の戦死者遺骸交換事業）を通じて北朝鮮側に引き渡された人民軍兵士1万768名の遺骸を埋葬した墓地である²²⁾。同じ事業によって引き渡された中国人民志願軍2760名の遺骸は、近くの志願軍烈士墓に埋葬され、同じ日に墓碑除幕式が催された。

その後、朝鮮人民軍創建記念日（1977年まで2月8日、1978年から4月25日）、祖国解放戦争勝利記念日（7月27日）、中国人民志願軍参戦記念日（10月25日）などに際して、開城の人民軍烈士墓、志願軍烈士墓に花環が捧げられたことを報じる記事が『労働新聞』に掲載されることになった²³⁾。そのため、開城の人民軍烈士墓は、1990年代後半までそのようなものとして知られるほぼ唯一のものであったのである。

（2）人民軍烈士塔・祖国解放戦争勝利記念塔の建立

人民軍烈士墓が北朝鮮メディアに登場しなかったのには、もう1つの理由があると思われる。1958年にピョンヤン市内に人民軍烈士塔が建立され、各種の記念日にはこの塔に花環、花束などが捧げられ、戦死者を追悼する行事が開かれることになった。そのため、それを報じる記事の陰に各地の人民軍烈士墓の存在が隠されてしまったのではないかと考えられる。

人民軍烈士塔は、1955年6月25日の内閣決定第61号「祖国解放戦争で戦没した朝鮮人民軍および中国人民志願軍将兵たちの追慕塔を建設することについて」によりピョンヤン市内の解放山に建てられることになった²⁴⁾。4年後の1959年2月8日の人民軍創建記念日に高さ24mの人民軍追慕塔が竣工した。塔の上には、銃を構える兵士の像が据えられ、高い塔身の前面に金文字で「人民軍烈士墓」の文字が浮彫りされているが、当初「追慕塔」と名づけられていた²⁵⁾ことからわかるように、朝鮮戦争で戦死した人民軍将兵を追悼・記憶する施設として建設されたものである。そのため、「記念的でありながら敬虔な雰囲気をかもし出すように形象され」たという²⁶⁾。

その後の各種記念日には人民軍烈士塔への花環進呈が『労働新聞』などのメディアに報じられることになった。例えば、1968年2月8日には金日成名義の花環、朝鮮労働党中央委員会常任委員会、共和国内閣の共同名義の花環が「追慕塔」に捧げられた²⁷⁾。

ところが、停戦から40年を迎えた1993年7月、人民軍烈士塔に代わるものとして、新たに「祖国解放戦争勝利記念塔」が建てられた。これは「勝利像」を中心として左右に10の群像彫刻を配置したもので、普通江右岸の公園に置かれた。「勝利像」は、追慕塔の銅像とは違って、兵士が旗をなびかせながら「戦争勝利万歳」を叫ぶ躍動的な銅像である。同月26日に行われた竣工式には、金日成が出席した²⁸⁾。人民軍烈士塔や革命烈士陵、愛国烈士陵の竣工式に出席しなかった金日成が戦争勝利記



（画像3）人民軍烈士塔
（『平壤概観』外国文出版社、1988年）

念塔竣工式に出席したのは、それを重視する姿勢を示したことになる。「勝利像」を中心とする群像彫刻を置いた公園は現在、祖国解放戦争勝利記念館の前庭となり、「勝利像」は記念館の正面前にその位置を占めている。

こうして、各種記念日に花環を捧げる場所は、1993年から革命烈士陵、愛国烈士陵と祖国解放戦争勝利記念塔の3カ所になった（このほか金日成銅像、後に金正日銅像も加わる）。「人民軍追慕塔」から「祖国解放戦争勝利記念塔」への変化は、戦死者を追悼・記憶するにとどまらず、戦争の勝利を確認することを通じてアメリカとの闘いの決意を固めるという意味をもっている。



（画像 4）祖国解放戦争勝利記念館前の勝利記念塔
（中央が「勝利像」）

（記録映画「전승의 역사 영원하리: 조국해방전쟁승리기념관（戦勝の歴史永遠なり：祖国解放戦争勝利記念館）」より、
<https://www.youtube.com/watch?v=BVUtCAwI3pM>）

ともあれ、2013年に祖国解放戦争参戦烈士墓が造成されるまで、人民軍烈士塔と祖国解放戦争勝利記念塔が朝鮮戦争の戦死者を追悼し記憶・顕彰する施設の役割を果たした。いずれの塔も戦死者の具体像を思い描くことのできない抽象的な顕彰施設であるが、その抽象性のゆえに各地に存在していた人民軍烈士墓への言及は、開城のそれを除いて、北朝鮮メディアに登場することはほとんどなかったのである。

筆者が見出した唯一の例外は、『労働新聞』1968年2月9日に「ピョンヤン市内各機関と勤労者たちが朝鮮人民軍追慕塔に花環と花束を捧げた／各地勤労者たちが朝鮮人民軍および警備隊墓地に花環を捧げた」ことを報じる記事である。しかし、この記事は、人民軍・警備隊の墓地がどこにあるかを記していないため、人民軍墓地の実在を感じ取ることのできないものであった。

3 金正日政権期の変化

（1）「烈士墓」への言及

金正日政権誕生から2年後の1996年に1つの変化が表われた。この年の記念日報道が、ピョンヤンにある革命烈士陵、愛国烈士陵、祖国解放戦争勝利記念塔への花環進呈に加えて、「各地にある烈士たちの銅像と人民軍烈士塔、烈士墓に花環が進呈された」と報じるようになったことである。最初の記事は、同年の人民軍創建記念日に関するものだった。4月26日の『労働新聞』は第3面で、前日の25日に革命烈士陵、愛国烈士陵、祖国解放戦争勝利記念塔のほか、「英雄的朝鮮人民軍創建64周年を迎えて各地にある烈士たちの銅像と人民軍烈士塔、烈士墓に花環が進呈された。花環進呈には、地方党、政権機関、行政経済機関、勤労団体責任幹部（イルクン）たち、朝鮮人民軍将領たちと軍人たち、社会安全員たち、各階層勤労者たちと青少年学生たちが参加した」と報じた。

この記事が言及する「烈士たちの銅像」とは、朝鮮戦争期の戦死者のうち「共和国英雄」とされる「烈

士」の銅像が、この頃、各地の学校に銅像が建てられていたことを意味している。1996年に共和国英雄ロ・テジンの半身像が平安南道温泉郡のクムゴク高等学校に建てられ、同校がロ・テジン高等学校に改称されたほか、3名の共和国英雄、1名の少年パルチザン、1名の少年英雄の半身像が各地の高等学校に建てられた。4名の共和国英雄はすべて朝鮮戦争の期間に戦死したとされる²⁹⁾。翌1997年にも7名の共和国英雄の半身像が各地の高等学校に建てられた。7名の共和国英雄のうち5名は朝鮮戦争の時期に戦死した兵士であった³⁰⁾。

『労働新聞』記事が言及している「人民軍烈士塔」は、ピョンヤンにあるものを指すのではなく、後のテレビニュースの報道からわかるように元山や海州に建立されていた人民軍兵士をかたどった像を持つ塔を意味している。元山の朝鮮人民軍烈士塔は、1990年8月5日に除幕式が行われたことが確認できる³¹⁾。元山市内の南山に建てられた烈士塔は、高さ31mの塔身と陸海空3軍の兵士像で構成されている。海州の烈士塔もほぼ同じ頃に建立されたものと思われる。



(画像5) 元山の人民軍烈士塔
(2014年7月27日朝鮮中央テレビのニュースより)

さらに、この記事で言及されている「烈士墓」は、具体的にどこにあるかが示されていないものの、これ以前に道や市・郡のレベルでつくられていた戦死者の墓地を指しているものと思われる。

このように北朝鮮メディアで地方の烈士の銅像、人民軍烈士塔、烈士墓への言及がなされるようになったのは、金正日政権が1998年から「先軍政治」を唱え始めたことと関連していると考えられる。朝鮮戦争での戦死者を指導者＝党＝国家に忠実な「烈士」として顕彰することを通じて、軍を最優先する「先軍政治」の条件を整える措置であったと位置づけられよう。また、戦争から半世紀近くの時間が流れたことを考えると、戦争の体験、戦死者の精神を次世代に受け継がせることによって、対米闘争への決意と団結を固めようとしたものといえるかもしれない。

(2) 各道烈士陵の造成

金正日政権期に起こった変化は、各地の烈士像、人民軍烈士塔、烈士墓への言及にとどまらなかった。金正日政権末期の2010年前後に「烈士陵」が造成または改建されたことを伝える記事が掲載されるようになったのである。ただし、これは戦死者墓地ではなく、ピョンヤンの愛国烈士陵と同じ性格をもつ道レベルの烈士陵であるが、愛国烈士陵と同じようにそこに葬られる「烈士」には朝鮮戦争戦死者も含まれていたと見られる³²⁾。

2008年から2010年にかけて『朝鮮中央通信』が報じた各道の烈士陵の竣工式に関する記事にもとづいて時期順に整理すると、次のようになる(『朝鮮中央通信』の記事配信日は竣工日と同じ)。

2008年12月30日 平安南道平城市に平城烈士陵竣工

2009 年 7 月 2 日 咸鏡南道咸興市会上区域豊慶里の山麓に咸興烈士陵竣工
2009 年 12 月 9 日 黄海南道海州市首陽山麓に海州烈士陵竣工
2009 年 12 月 18 日 黄海北道沙里院市正方山に沙里院烈士陵竣工
2010 年 6 月 29 日 両江道恵山市蓮峰山麓に恵山烈士陵竣工
2010 年 7 月 11 日 江原道元山市に元山烈士陵竣工
2010 年 8 月 15 日 慈江道江界市に江界烈士陵竣工、咸鏡北道清津に清津烈士陵竣工
2011 年 4 月 10 日 平安北道新義州市に新義州烈士陵竣工

これらの報道から、2008 年から 2011 年にかけてすべての道に烈士陵が造成されたことがわかる³³⁾。これらの烈士陵にどのような人物の墓があるかは、咸興烈士陵と海州烈士陵についての次のような説明からうかがい知れる。

咸興の「烈士陵には過ぐる時期、党と首領に限りなく忠実で、人民の自由と解放のため、祖国の統一と富強繁栄のためにすべてを捧げ、闘争した烈士たちとイルクンたち、勤労者たちの遺骸が安置され、石写真がはめられた墓碑が建てられた。」そしてここに墓が安置された人物として、「抗日革命烈士」1 名、「反日愛国烈士」2 名のほか、咸鏡南道農村經理委員会委員長、咸興榮譽軍人樹脂日用品工場支配人、国家科学院咸興分院研究士、咸興水利動力大学室長などの名前があげられている。

海州の「烈士陵には、祖国の自由と独立、隆盛繁栄と統一のための聖なる闘争において、生を輝かせた烈士たちと功労者たちの遺骸が安置され、石写真がはめられた墓碑がたてられた」として、墓が安置された人物は、反日愛国烈士 2 名のほか、新院郡人民委員会委員長、碧城郡オクチョン協同農場管理委員長、信川郡セナル協同農場管理委員長などであると報じられている。

これらの記述から、各道の烈士陵はピョンヤンの愛国烈士陵に相当する地方レベルの墓地であると考えられる。つまり各地方の「抗日革命烈士」「反日愛国烈士」をはじめとして、政権機関、軍、社会团体、教育機関などの重要幹部を埋葬する施設であり、愛国烈士陵とおなじように個人の墓がつくられ、それぞれに墓碑が立てられたものである。恵山、江界、新義州の烈士陵に関しては、共和国英雄の墓もあると報じられているので、朝鮮戦争戦死者のうち共和国英雄の墓もそこに建てられたと考えられる³⁴⁾。

すべての道の烈士陵造成が終わった 2011 年以降、各種記念日に関する報道では、それまでの烈士の銅像、人民軍烈士塔、烈士墓に加えて烈士陵への言及がなされるようになった。例えば、同年 4 月 26 日『労働新聞』は、「英雄の朝鮮人民軍創建 79 周年に際し、25 日各地にある烈士たちの銅像と人民軍烈士塔、烈士陵、烈士墓に花環が進呈された」と報じている。

4 金正恩政権期の参戦烈士墓・各地人民軍烈士墓の造成・整備

(1) 祖国解放戦争参戦烈士墓の造成

停戦協定締結 60 周年を 2 日後に控えた 2013 年 7 月 25 日、ピョンヤン市西城区域の石礪山麓に祖国解放戦争参戦烈士墓が竣工した。日本など海外のメディアも竣工式を取材する中で、予定になかった金正恩が姿を現し、竣工式に参列した。そのため、海外のメディアでも参戦烈士墓竣工式の模様が伝えら

れた。停戦協定 60 周年に際しては、祖国解放戦争勝利記念館の新築工事も完了して開館した³⁵⁾ので、「戦勝」を祝う行事が連日のように続いたが、金正恩としては参戦烈士墓の竣工を最も重視する姿勢を示したのである。

参戦烈士墓の造成については、金正恩の直接の指示があったとされる。金正日の死去によって 2011 年 12 月に政権を引き継いだ金正恩は、1 年後の 2012 年 12 月初めに参戦烈士墓の建設を指示したという。

その方〔金正恩〕は、昔から墓には墓主がいたと、過ぐる祖国解放戦争に参加して犠牲になった人民軍烈士たちの墓にも当然墓主がいなければならないと語られた。／そうして、いまその墓主は誰でなければならないかということだが、まさに我が党が偉大な祖国解放戦争時期に犠牲となった有名無名の人民軍戦士たちの墓主にならねばならないと、そして自ら以前に人民軍烈士墓を立派に整えることについて語ったと言われた。³⁶⁾

その方は、ピョンヤン市万景台区域にある人民軍英雄烈士墓をすでに補修したというが、その程度の整備ではだめだといわれ、過ぐる祖国解放戦争は数名の指揮官が戦って勝った戦争ではないと、我々が過ぐる祖国解放戦争で達成した偉大な勝利には首領の命令を高くいただき祖国守護戦に勇躍立ち上がった有名無名の烈士たちが発揮した英雄的偉勲がしみ込んでいると話され、彼らが英雄的に戦ったために我が祖国を敵の侵略から守り通すことができたと言われた。³⁷⁾

この記述から、朝鮮戦争の戦死者のうち高位の指揮官らを埋葬した人民軍英雄烈士墓がすでにピョンヤン市万景台区域に存在していたが、金正恩はさらに多くの「有名無名の烈士」を顕彰する墓地が必要であり、その「墓主」は労働党でなければならないと述べたことがわかる。労働党がそれらの英雄的戦死者を顕彰する主体となるべきであって、そのためには党＝国家レベルの烈士墓が必要だとされたのである。

金正恩の指示の後、60 年目の「戦勝節」に間に合わせるために参戦烈士墓（当初は「人民軍烈士墓」という名称が考えられていた）の造成が急がれ、ほぼ半年で竣工に至ったということになる。参戦烈士墓は、ピョンヤン市内と順安にある国際空港をむすぶ道路に面した場所にあるため、ピョンヤンを訪問する外国人も容易に目にすることができる。むしろ、外国人の目にもつきやすいところが選ばれたとも考えられる。

ところで、参戦烈士墓に墓があるのは、「共和国英雄」とされる朝鮮戦争期の戦死者に限られている。墓の数は、竣工時点で 500 余りとされていたが、その後少し増えて、2015 年時点で



(画像 6) 祖国解放戦争参戦烈士墓

(2013 年 8 月筆者撮影)

559名の烈士の墓になったようである³⁸⁾。

この数字は、朝鮮戦争期に各種の勲章を授与された将兵の統計と照らし合わせると、ほぼ「共和国英雄」の数と一致する。朝鮮戦争期の勲章授与者は、共和国英雄 584 名、労力英雄 20 名、国旗勲章第 1 級 2105 名、国旗勲章第 2 級 2518 名、国旗勲章第 3 級 5 万 8883 名、自由独立勲章第 1 級 98 名、自由独立勲章第 2 級 3155 名、戦士の栄誉勲章第 1 級 8036 名、戦士の栄誉勲章第 2 級 11 万 4454 名、労力勲章 202 名、軍功メダル 58 万 3535 名、功労メダル 3 万 6910 名であった³⁹⁾。つまり、最高の栄誉である「共和国英雄」勲章を授与された将兵とほぼ同じ数の墓が参戦烈士墓にあるということになる⁴⁰⁾。

2013 年の竣工以後、各種記念日には革命烈士陵、愛国烈士陵とならんで、参戦烈士墓に花環が進呈されることになった。のみならず、2014 年、2015 年、2017 年の「戦勝節」（7 月 27 日）には、金正恩自らが参戦烈士墓を訪れて花環を捧げている。現在の金正恩政権にとって参戦烈士墓は、革命烈士陵や愛国烈士陵以上に重要な位置を占める「烈士」顕彰施設となっているのである。

(2) 各地人民軍烈士墓の造成・整備

金正恩政権期には、国家レベルの参戦烈士墓だけでなく、地方レベルの人民軍烈士墓の造成と整備も進められた。

2013 年 2 月 11 日に開かれた朝鮮労働党中央委員会政治局会議で決定書「朝鮮民主主義人民共和国創建 65 周年と祖国解放戦争勝利 60 周年を勝利者の大祝典として迎えることについて」が採択された。決定書は 10 項目にわたって具体的な事業をあげているが、そのうち 3 番目の項目は「ピョンヤン市に人民軍烈士墓を新たに建設し、全国各地の人民軍烈士墓、烈士追慕塔をよく整え、1950 年代の祖国守護精神に見習うための事業を多様に進行すること」となっている⁴¹⁾。

この決定書にもとづいて、各地の人民軍烈士墓を「改建」して、門柱や烈士塔、花環進呈台などを設け、道路や階段・通路を整備し、樹木や芝生を植えるなどの作業が進められた。5 月には、慈江道、黄海南道碧城郡・新院郡、咸鏡北道会寧市・金策市・花臺郡、江原道文川市・鉄原郡・平康郡・法洞郡、黄海南道銀波郡、平安北道新義州市、黄海南道沙里院市でこのような作業が進められていることが報じられた⁴²⁾。

停戦 60 周年を迎えた同年 7 月 27 日までに、市・郡レベルの人民軍烈士墓が建設・「改建」されたと見られる。7 月 25 日の『労働新聞』は、各道の労働党委員会が下部の委員会と協議しながら「改建」計画を立て、資材・労働力などを手配して、期限までに工事を完成させたとしている。特に注目されるのは、平安北道熙川市ではすでに存在していた人民軍烈士墓 5 個所を移設したとしていること、平安北道の鹽州郡、東林郡、大館郡、寧辺郡の烈士墓を「よい位置に移して新たに建設」したとしていることである。「改建」が単なる整備にとどまらず、移転・統合を含むかなり大掛かりな事業であったことが想像される。

ピョンヤンや道レベルの人民軍烈士墓は、新たに造成されるものが多かったためか、翌 2014 年の「戦勝節」に合わせる形で造成・整備されたようである。

2014 年 7 月、平壤市楽浪区域南寺里地区デムン山の麓にピョンヤン人民軍烈士墓が新設されたことを伝える『労働新聞』の記事によれば、烈士墓の新設は 2013 年 11 月市党委員会・市人民委員会での金正恩の指示によるものであり、ピョンヤン市内の各区域・郡の人民軍烈士墓に安置されていた祖国解

放戦争参戦者の遺骸 3426 体を新設された烈士墓に安置したという⁴³⁾。つまり、2014 年以前にはピョンヤンの各区域・郡に烈士墓があったが、それらを統合したピョンヤン人民軍烈士墓が造成され、墓もそこに移されたということになる。

咸興の人民軍烈士墓も同じ頃に完成したことは、2014 年 7 月戦勝節を前にして報じられた次の記事から推測できる。

この日、人民軍軍人たちは、咸興市にある人民軍烈士墓を訪れた。人民軍烈士墓を見て回りながら彼らは、偉大な金日成同志の領導を高くいただき、米帝の武力侵攻を退ける祖国解放戦争で発揮した烈士たちの闘争精神を深く心に刻んだ。⁴⁴⁾

咸興市には、先に見たように 2009 年に烈士陵が造成されていたが、その隣の位置に、2014 年 7 月までに新たに人民軍烈士墓が造成されたと見られる。この人民軍烈士墓は、咸興市レベルのものではなく、咸鏡南道レベルの烈士墓として造成されたものであろう。



(画像 7) 咸興人民軍烈士墓（左）と咸興烈士陵（右）
(Google Earth)



(画像 8) 咸興人民軍烈士墓（左）と咸興烈士陵（右）
(2014 年 7 月 24 日朝鮮中央テレビのニュースより)

テレビニュースなどの映像を見る限りでは、各地の人民軍烈士墓はほぼ同じ形式でつくられている。道レベルの人民軍烈士墓は、「門柱と墓碑、花環進呈台、教養広場などで構成されている。／烈士墓入口の左側と右側に立てられた門柱には、人民軍帽標、共和国旗などが形象されており、《1950》《6.25》と《1953》《7.27》という文字が刻まれている。／花環進呈台には、共和国英雄メダルまたは人民軍帽標、月桂樹などが赤色の大理石板に浮彫りされている。／墓碑の前面には《人民軍烈士墓》という文字、背面には烈士たちの名前と烈士数が刻まれている⁴⁵⁾」と説明されている。

これに付け加えるとすれば、指揮官クラスの将官や勲章を授与された将兵などの個人の墓のほか、土饅頭の合同墓が設けられていること、墓碑は 10m ほどの高さの塔になっており、上に国家を象徴する星をいただいていることなどである。市・郡レベルの人民軍烈士墓の多くには墓碑（塔）や個人の墓がなく、土饅頭の前に「人民軍烈士墓」と刻んだ石碑が建てられているようである。

道レベルの人民軍烈士墓、市・郡レベルの人民軍烈士墓に共通するのは、「教養マダン（広場）」が設けられていることである。烈士墓の前で集会を開いたり、朝鮮戦争体験者（老兵）の話を聞いたりすることを通じて、朝鮮戦争の体験を語り継ぐとともに対米闘争と革命の勝利に向けての決意を固める場として機能しているのである。

こうして 2013 年から 2014 年にかけて、朝鮮戦争期の戦死者を埋葬し顕彰する施設として、祖国解放戦争参戦烈士墓—各道の人民軍烈士墓—各市・郡の人民軍烈士墓という体系が整えられるに至った。

そのことは、戦勝節に関するメディアの報道内容にも反映している。

2012 年までの戦勝節に関する朝鮮中央テレビのニュースでは、各地の記念行事として音楽会・写真展・討論会・老兵の回想を聞く会などの開催が報じられたが、人民軍烈士墓への花環進呈には触れられていなかった。翌 2013 年のニュース（7 月 28 日）では、開城市・惠山市・沙里院市・南浦市・平城市・熙川市（平安北道）の烈士陵、人民軍烈士墓での追悼式が報じられたが、音楽会などの行事に力点を置いた報道だった。

ところが、2014 年の戦勝節に際しては、朝鮮中央テレビ 7 月 27 日 20 時ニュースが、ピョンヤンの革命烈士陵、愛国烈士陵、参戦烈士墓のほか、惠山市（烈士陵）・元山市（人民軍烈士追慕塔）・咸興市・清津市・沙里院市・海州市・新義州市・江界市（以上、人民軍烈士墓）、平城市・南浦市・羅先市・開城市・洗浦郡（江原道）の人民軍烈士墓に花環が捧げられたことを報じた。停戦協定 60 周年にあたる前年の報道に比べると、すべての道の人民軍烈士墓・烈士陵に言及しているだけでなく、郡レベルの人民軍烈士墓（洗浦郡）での行事も報じている点が注目される。

このような道レベルと市・郡レベルの人民軍烈士墓に埋葬されているのは誰なのかという問題に関しては、2つの可能性が考えられる。1つは朝鮮戦争期に戦死した将兵を戦死した地域で埋葬したものである可能性、もう 1つは戦死者



（画像 9） 江原道洗浦郡の人民軍烈士墓
（2014 年 7 月 27 日朝鮮中央テレビのニュースより）

の出身地の人民軍烈士墓に埋葬したものである可能性である。いずれの可能性が高いか断言できないが、北朝鮮のほぼすべての郡に人民軍烈士墓がつくられていることから考えて、地域出身の戦死者を埋葬する形をとった（実際に遺骸があるかどうかは別として）ものが多くあると見られる。一方で、戦争期に戦死者をその場で埋葬したものもあるはずなので、人民軍烈士墓は両者の性格を合わせもっているのではないだろうか。

もう1つ注目すべき事実は、中国にも「朝鮮人民軍烈士墓」が存在することである。『朝鮮中央通信』2012年11月6日の記事「中国の人民軍烈士墓竣工」は、吉林省公主嶺市にある「朝鮮人民軍軍人たち」の墓地が「改建・補修」されて、5日に竣工したと伝えた。竣工式には、北朝鮮からの代表团、瀋陽駐在の北朝鮮総領事のほか、中国人民解放軍総政治部、中国政府外交部・民政部・国防部、吉林省政府などの関係者も参列し、北朝鮮の愛国歌と中国国歌が演奏されたという。演説では、「朝中両国の軍隊と人民が共同の敵に反対して勇敢にたたかった」ことが強調された。

この「人民軍烈士墓」は、いったいどのようなものなのだろうか。朝鮮戦争の時期、公主嶺には中国人民解放軍の空軍基地があったが、そこで朝鮮人民軍の空軍兵士の訓練などが行なわれており、訓練・作戦中に死亡した朝鮮人民軍将兵75名が基地近くに埋葬されたものとされる⁴⁶⁾。2012年に朝中両国の協力でこれが「改建・補修」されたことを伝える記事が朝鮮・中国両国のメディアで報じられたのである。

おわりに

本稿では、朝鮮戦争時期の北朝鮮の戦死者がどこに、どのように葬られているかを検討した。革命烈士陵、愛国烈士陵に埋葬されている戦死者も確認できるが、その数はあまり多くない。大部分の戦死者は、人民軍烈士墓と名づけられる各地の戦死者墓地に埋葬されている。そのような戦死者墓地には、祖国解放戦争参戦烈士墓—各道の人民軍烈士墓—各市・郡の人民軍烈士墓というヒエラルキーが存在すると考えられる。

しかし、これらの戦死者墓地が造成・整備された時期はヒエラルキーとは逆に、各地に戦死者墓地（それらが次第に「人民軍烈士墓」と名づけられたと見られる）が最初につくられ、その後、地方によっては道レベルの人民軍烈士墓がつくられたと考えられる。そして、金正恩政権期になってから、つまり朝鮮戦争停戦から60年経ってから国家レベルの祖国解放戦争参戦烈士墓が造成されるとともに、道・市郡レベルの人民軍烈士墓も造成・整備されるという過程をたどった。

これはいったい何を意味するのだろうか。

朝鮮戦争での戦死者を戦場近くに埋葬する墓地が最初に設けられたことは容易に想像できよう。ついで、遺家族が戦死者を追悼するための施設がつくられるのも、自然な流れである。郡やそれより下のレベルの追悼施設が、朝鮮戦争の期間あるいはその直後につくられ、それらが「人民軍烈士墓」と呼ばれるようになったと見られる。このような動きは、戦死者に対する北朝鮮の人びとの自然な感情を反映しているといえる。

一方、党・国家は、「人民軍追慕塔」のような象徴的な施設を建設したが、具体性のある「烈士墓」と

としてはパルチザン戦士たちを顕彰する革命烈士陵、党・国家の幹部や一部の榮譽軍人を埋葬する愛国烈士陵を造成するにとどめた。パルチザン闘争の歴史こそが北朝鮮という国家の成立と存続の根拠とされていたのである。これが金日成政権期までの状況であった。

金正日政権期に入ると、ピョンヤンの「祖国解放戦争勝利記念塔」だけでなく地方にある「人民軍烈士墓」もメディアに登場するようになった。朝鮮戦争戦死者の精神を受け継ぐという意識を社会の底辺にも広げることが意図されていたと思われる。

そして、金正恩政権期になってようやく、国家レベルの戦死者顕彰施設である参戦烈士墓がピョンヤンに造成されるとともに、道や市郡レベルでも人民軍烈士墓が造成・整備されたことによって、北朝鮮における戦死者追悼・顕彰施設の体系が完成した。「遊撃隊国家から正規軍国家への移行」という和田春樹の仮説⁴⁷⁾を借りるなら、戦死者の追悼・顕彰施設体系の完成は、北朝鮮が「正規軍国家」としての性格を整えたことを表わしていると解釈できる。徴兵制を基盤とする国民国家にとって国家防衛に命を捧げた人民（国民）を慰霊・追悼することはきわめて重大な事業であると考えられることができるとすれば、異質な国家とみなされる北朝鮮も国民国家の特徴を備えたことを示している。その上で、北朝鮮にとっては冷戦終結後も続く対米闘争への決意を固め、現体制を守護するために、朝鮮戦争時期の戦死者を「烈士」として顕彰することが不可欠な事業となっているのである。

最後に、13,4 歳の少女（と思われる）が書いた詩を紹介して、本稿を閉じることにする。

私の故郷の烈士墓前で

黄海北道長豊郡長豊中学校 3 年生 ムン・ユンヒ

私の住む分界沿線〔＊〕の故郷には 〔＊〕軍事境界線沿い
人民軍隊の英雄たちの烈士墓があります
戦火の日 血を流してたたかった英雄たち
名前だけ残して ここにいます

謹んで襟をただし
英雄おじさんたちを 追慕して立てば
幼いこの胸も ドキドキ高鳴り
私の故郷を守った銃声が 聞こえます

私が生きる　こんにちの揺りかご〔＊〕のため　　　　　〔＊〕暖かく育ててくれる環境
貴重な命を捧げた英雄たち
ここでは赤い花も　何も思わずには見ることができません
芝も無心に踏むことができません

ああ 戦火の日 この地を守ってたかった

故郷の烈士墓の前で かたく誓います
私も英雄たちの魂を受け継いで
愛する私の祖国を守って行きます

(『児童文学』2009年6月号) 〔＊〕で示した部分は筆者の注

(補記1)

本年(2018年)1月22日、朝鮮労働党中央委員会政治局は、朝鮮人民軍創建記念日を2月8日とすることを決定した。1978年以来、創建記念日とされてきた4月25日は、1932年に金日成が遊撃隊を組織したとされる日であったが、今回の決定は1977年までの創建記念日2月8日に戻す措置である。

政治局決定「2月8日を朝鮮人民軍創建日として意義深く記念することについて」は、「主体37(1948)年2月8日は、朝鮮人民革命軍を正規的革命武力に強化発展させて、朝鮮人民軍の誕生を宣布した歴史的な日である」と述べ、2月8日を「建軍節」と呼ぶとしている。政治局のこの短い決定文において、「正規軍隊」「正規的革命武力」という言葉が5回繰り返されている(『労働新聞』2018年1月23日)。

本論文で論じたように、金正恩政権は徴兵制にもとづく正規軍を重視する姿勢を示しているが、人民軍創設から70年目に当たってとられた今回の措置は、現在の朝鮮人民軍の起源をパルチザン部隊に求めるのではなく、それを引き継ぎながら組織された正規軍(朝鮮人民軍)の創設に置くことによって、正規軍重視の姿勢をいっそう明確にしたものといえる。

なお、4月25日は「朝鮮人民革命軍創建日」とすることが合せて決められている。(2018年3月10日)

(補記2)

2018年に入って南北朝鮮の各種交流と首脳会談の開催、そして朝米交渉が急テンポで進んでいるが、その中で迎えた7月27日の戦勝節に際して、金正恩は参戦烈士墓を訪れ花環を捧げた。その点では従来の姿勢に変化がないように見える。しかし、2017年の記事には「反帝反米大決戦を総決算し社会主義偉業の最後勝利を必ず成し遂げねばならない」と書かれていたが、今年の記事にはそのような文言が見られない(『労働新聞』2017年7月28日、同2018年7月27日)。今年の戦勝節には、金正恩が中国人民志願軍烈士陵园にも出向いて献花したことも注目される(『労働新聞』2018年7月27日)。今後、南北の交流・和解、朝米の関係改善が進んでいくとすれば、参戦烈士墓や人民軍烈士墓の扱いがどのようになっているか、大いに注目されるところである。(2018年8月15日)

注

- 1) Heon-ik Kwon and Byung-ho Chung, *North Korea: Beyond Charismatic Politics*. Lanham (Meryland, USA), Rowman & Littlefield Publishers, 2012. 권현익・정병호『극장국가 북한: 카리스마 권력은 어떻게 세습되는가(劇場国家北韓: カリスマ権力はいかに世襲されるか)』창비(創批), 2013年2月.
- 2) 韓国語版 pp.151、英語版 p.105. 引用にあたっては、韓国語版をもとにしながら英語版も参照して翻訳した。
- 3) 韓国語版 p.154、英語版 p.106.
- 4) J. ハリデイ, B. カミングス(清水知久訳)『朝鮮戦争: 内戦と干渉』岩波書店、1990年、228ページ。各参戦国将兵の死者は、韓国4万7000名(戦闘死)、米国3万3629名(戦闘死)、その他国連軍3194名(戦闘死)

であるとし、中国人民志願軍の戦死者は百万名と推計しているが、これは過大であろう。北朝鮮各地につくられている志願軍烈士陵の埋葬者数は、17万8562名とされている（中国人民解放軍総政治部組織部編『朝鮮平安南道倉倉郡 中国人民志願軍烈士陵園』出版社記載なし、2011年、163ページ）。

- 5) 朝鮮戦争犠牲者の墓地としては、これ以外にも在北人士墓（ピョンヤン市龍城区域）と中国人民志願軍烈士陵園（平安南道倉倉郡など各地）がある。ただし、前者はすべてが戦争時期の死者というわけではない。これらについては、今後の研究課題としておきたい。
- 6) 『朝連中央時報』第68号、1948年12月21日。
- 7) 최봉식 (チェ・ボンシク) 『대성산혁명렬사릉 (大城山革命烈士陵)』 과학백과사전출판사 (科学百科事典出版社)、1991年、28ページ。
- 8) 金日成が「解放後初めてピョンヤン市モランボンの陽地に革命烈士たちの墓所を定められ、抗日革命烈士たちの遺骸を安置するよう」指示したという（同前、4ページ）。
- 9) 現在の革命烈士陵の場所ではなく、大城山北側麓の美川湖ほとりに「抗日革命烈士たちの遺骸を…集中安置する」よう、金日成が指示したという（同前、4ページ）。
- 10) ただし、すべての烈士の遺骸が葬られているわけではない。例えば、「朝鮮人民革命軍指揮官」とされる権永壁・李東傑・池泰環、「祖国光復会長白果責任者」李悌淳の4名は、1945年3月10日にソウル（当時京城）の西大門刑務所で処刑されたが、その遺骸がピョンヤンに移されたとは考えられないからである。
- 11) 前掲『대성산혁명렬사릉』1ページ。
- 12) 前掲『대성산혁명렬사릉』に略歴が記されている烈士の人数。
- 13) 『로동신문 (労働新聞)』2015年11月12日。
- 14) 김광운 (キム・グァンウン) 『북한 정치사 연구 1 (北韓政治史研究 1)』 선인 (先人)、2003年、収録の写真による。所属、死亡時期は墓碑に記されたものである。
- 15) 前掲『대성산혁명렬사릉』に記されている各人物の略歴による。
- 16) 사회과학원 김일성동지혁명역사연구소 (社会科学院金日成同志革命歴史研究所 『역사사전 (歴史事典)』第4巻、과학백과사전종합출판사 (科学百科事典出版社)、2002年、349ページ。
- 17) 石写真 (돌사진) とは、石に写真を焼き付けたもので、北朝鮮独自の技術とされる。
- 18) ちなみに、1991年時点では224基 (안동일 (アン・ドンイル) 「최초공계: 평양 애국열사릉에는 누가 묻혔는가 (最初公開:ピョンヤン愛国烈士陵には誰が葬られたか)」 『역사비평 (歴史批評)』第16号、1991年8月、107ページ)、2002年時点では515基であった（前掲『북한 정치사 연구 1』）。革命烈士陵と同じように愛国烈士陵に墓がある人物の遺骸がすべてここに葬られているわけではない。例えば、李徳九（済州島パルチザン指導者）は済州島で戦死しており、ピョンヤンに遺骸が移されたとは思えない。
- 19) 2012年5月日朝友好京都ネットワーク訪朝団の歴史チーム（代表・水野直樹）の調査による。
- 20) 後述のように、2013年に参戦烈士墓が竣工したため、愛国烈士陵に葬られていた共和国英雄が参戦烈士墓に移葬されたと見られる。例えば、画像2で示したり・スボクは朝鮮戦争時期の共和国英雄を代表する兵士だが、おそらく地方の烈士墓に葬られていたのが2001年7月に愛国烈士陵に移葬され（『朝鮮中央通信』2001年7月5日）、その後、2013年に参戦烈士墓に再度移されたと見られる。『労働新聞』2017年7月27日の記事「チュチュ朝鮮の勝利伝統をしっかり受け継がん」は、参戦烈士墓に墓のある共和国英雄の1人としてリ・スボクの名前をあげている。ただし、朝鮮戦争戦死者すべてが共和国英雄ではないので、いまま愛国烈士陵に墓が残る戦死者もいるものと思われる。
- 21) 韓国語版 p.160、英語版 p.110。
- 22) 『로동신문 (労働新聞)』1957年2月6日。
- 23) 例えば、『로동신문 (労働新聞)』1967年10月26日。
- 24) 『로동신문 (労働新聞)』1955年6月25日。なお、志願軍戦死者の追慕塔は、ピョンヤン市内に「友誼塔」として建設された。
- 25) 『로동신문 (労働新聞)』1959年2月9日。除幕式を報じたこの記事でも、「追慕塔」とされている。
- 26) 리화선 (リ・ファソン) 『조선건축사 (朝鮮建築史)』 과학백과사전종합출판사 (科学百科事典出版社)、1989年、159ページ。
- 27) 『로동신문 (労働新聞)』1968年2月9日。
- 28) 『로동신문 (労働新聞)』1993年7月27日。
- 29) 『조선중앙년감 (朝鮮中央年鑑)』1997年版、142 - 144 ページ。
- 30) 『조선중앙년감 (朝鮮中央年鑑)』1998年版、204 - 206 ページ。銅像が立てられた学校の名称はすべて共和国英雄の名前にちなむものに変えられたが、これも朝鮮戦争戦死者を記憶し追悼・顕彰する方法の1つとなっている。注(20)で述べた共和国英雄リ・スボクについては、平安南道順川市にリ・スボク順川化学工業大学が存在する。

- 31) 『조선중앙년감 (朝鮮中央年鑑)』 1991 年版、163 - 164 ページ。
- 32) 郡レベルにも愛国烈士墓が存在すると見られる。平安北道球場郡には人民軍烈士墓とは別に愛国烈士墓があるとされている(『朝鮮郷土大百科』第5巻270ページ)。また、黄海南道碧城郡や咸鏡南道端川郡、同金野郡にも愛国烈士墓が存在するとされる(第8巻308ページ、第12巻184ページ、第12巻443ページ)。ただし、朝鮮戦争時期の民間人の死者、特に米軍・韓国軍などに虐殺された民間人の墓地を「愛国烈士墓」と名づけているところもあるようである。
- 33) 道に属さない直轄市・特級市として扱われているピョンヤン、南浦、開城、羅先に烈士陵があるかどうかは不明である。
- 34) ただし、「共和国英雄」がすべて朝鮮戦争戦死者というわけではない。また、後に見るように、ピョンヤンに国家レベルの祖国解放戦争参戦烈士墓が造成された際に、各道の烈士陵にあった朝鮮戦争期の「共和国英雄」の墓は参戦烈士墓に移されたと思われる。
- 35) 朝鮮戦争停戦直後の1953年8月にピョンヤン市の解放山に祖国解放戦争記念館がつくられたが、1974年普通江のほとりに新たに祖国解放戦争勝利記念館が竣工した(『平壤概観』外国文出版社、1988年、58 - 59ページ)。2013年に新築・竣工した同名の記念館は、もとの建物と普通江をはさんで祖国解放戦争勝利記念塔の公園を連結する位置に新たな建物を建て、展示内容を大幅に変更したものである。参戦烈士墓に埋葬された「共和国英雄」全員を紹介する展示コーナーも設けられており、記念館と参戦烈士墓がセットになっていることがうかがわれる。
- 36) 『조선의 7.27 (朝鮮の7・27)』 평양출판사 (ピョンヤン出版社)、2015年、25 - 26ページ。
- 37) 同上、29 - 30ページ。
- 38) 前掲『조선의 7.27』35ページ。ただし、実際に遺骸が埋葬されているかどうかは不明である。朝鮮戦争期に南の戦場で戦死した共和国英雄(例えば、従軍作家であった金史良)の遺骸が埋葬されているとは考えられない。
- 39) 『로동신문 (労働新聞)』2014年7月22日。前掲『력사사건』第4巻、168ページでは、共和国英雄533名(うち二重英雄5名)、労力英雄16名となっている。これら以外の勲章授与者数は『労働新聞』記事と同じである。
- 40) 朝鮮戦争期の共和国英雄がすべて戦死した将兵であるかどうかは明らかでない。戦死しなかった場合でも「共和国英雄」勲章を授与された者がいた可能性があるからである。
- 41) 『로동신문 (労働新聞)』2013年2月12日。
- 42) 『民主朝鮮』2013年5月15日。
- 43) 『로동신문 (労働新聞)』2014年7月25日。
- 44) 『로동신문 (労働新聞)』2014年7月20日。
- 45) 『朝鮮中央年鑑』2014年版345ページ。
- 46) 「朝鮮人民軍烈士墓修繕竣工儀式举行」2012年11月6日、公主嶺市人民政府ホームページ http://www.gongzhuling.gov.cn/yw/zwdt/201211/t20121106_2541907.html (2018年2月25日アクセス)。この記事については、京都大学人間環境学研究科博士課程の李然さんに教えていただいた。
- 47) 和田春樹『北朝鮮現代史』岩波書店、2012年、195ページ。ただし、和田の仮説は軍隊のあり方についてのものではなく、党＝国家体制のあり方を「遊撃隊国家」「正規軍国家」という言葉で表わしているものである。